

## 「LABOR」を考える

使用者委員 米盛 庄一郎

労働について辞書を引いてみると、①体力を使って働くこと ②賃金や利益を得るために心身をつかうこと と説明されています。「労」も「働」も同じく「はたらく」という意味の漢字です。では、労働を英訳すると「LABOR」になります。「LABOR」の意味を調べると、①労働、労力 ②ほねおり、苦心、仕事、苦役 ③労働者たち、労働階級、筋肉労働者、労務者側 ④英国労働党 ⑤出産の苦しみ、陣痛、分娩 という訳が出てきます。キリスト教での労働観は旧約聖書の「創世記」において、食べることを禁じられた果実を食べたアダムとイブに対して、神は罰として労働を与えたことに由来します。「労働」はつらく、苦しいもの、難儀なものとして考えられています。特に女性の出産に伴う陣痛を

「LABOR」と表現することに驚きと文化の違いを感じます。日本の文化では諸説もありますが、「はたらく」は「傍（はた）の者を楽（らく）にさせる」という意味があるとも言われています。いわゆる「はたらく」ことによって収入、金銭を得ることで自分を含めて家族が生活できるのです。また、技術や技能を身につけて、自身のレベルアップにもなり、また、その技量を次に伝授して、人を育てることもできます。継承というのも重要な技量のひとつなのです。

日本人は焦土化した国土で必死に働いてきて復興した歴史がありました。いま戦後70年を越えて経済成長期から安定期、または衰退期に入る目の前のようなところに来ています。人口減少と高齢化が大きな要因です。日本のあらゆるところで限界集落から消滅集落が増えてきます。今後就業者の減少で人手不足が企業の存続に影響を及ぼしてきています。外国人労働者の雇用や大規模な機械化、IoT、AIなどの方策は考えられますが、このような時こそ、本来日本の文化、「はたらく」が喜びになるよう、決して苦痛にならぬよう、労働者と使用者が知恵を出し合い、協力して日本を元気にしていくことが必要だと思います。